

エースとサボとルフィ  
と私

minthia

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメ、マンガの中で1番好きなONE PIECEの登場人物で好きなのがエース  
な女の子柄戸ライアは遅刻寸前で校門前にいたらトラックが突っ込んできて?!

※基本原作沿いですがオリ設定などありますのでご注意ください

# 目次

## 出会い編

第1話	プロローグ?	1
2話	あなたは誰? 私はライア!	
8		
3話	私の弟? その名はルファイ	
15		
4話	ルファイの傷	23
第5話	ゴムゴムの実	34



# 出会い編

## 第1話 プロローグ？

「ONE PIECE？それって面白いの？」

「面白いよ！ ていうかエースがカッコよすぎて泣くレベル！」

「エース？誰よその人」

「主人公のお義兄ちゃんだよ！」

私、柄戸ライアは友達に人気アニメ（マンガ）ONE PIECEの良さを

メッセージで画像とか送って1からずーっと説明中だよ！

（てか、ライア！時間見てる？もう家出てるよね？）

（え？あ！やばい！また後でね！）

ライアはダッシュで家を飛び出し、学校に向かっていた。

すると、校門前に居眠り運転のトラックが突っ込んできた

ライアはそれに気付かずと走っている

校門が見える教室にいる全生徒は、

トラックに気づいて見ていた

そのトラックが進む方向にライアがいたと気付いた時  
皆ライアに向かって叫び出した

「からどお!!!」

「ライアあああ!!!」

「逃げろおお!!!」

「ライア!!!」

ライア「?何みんな私が登校したのがそんなに嬉しいの?へへっ」

ライアはトラックが自分にぶつかるまで気付かなかったのだった

「「ライアア」ア」ア」ア」ア」イヤアアア」

即死だったらしい

ライアはトラックが自分にぶつかった瞬間全てを理解したのだ

(あ、なんだみんなこのことで叫んでたのか私、

死ぬんだ死ぬ前にONE PIECEもっと見たかったな…)

理解した瞬間願望が頭を占拠したライアはその事しか考えていなかった

『ライア…起きなさい…』

「んん……んん?」

『ご飯じゃないが起きなさい』

「…え?! (ここどこ)?」

『それは答えれないが想像に任せるとしようかの』

え、何この人地味に怖いんですけど

ていうか誰よっ!

『それも言えんなじやがお主の願いを叶えてやれるものじや

それ以上聞かんでくれ』

「心の声も聞こえてるんですね

私の願いつて…わかりました聞かないです」

『では、向こうで理解してくれのよろしく頼む』

「はい」

? 「こんにちはは私の天使

私はあなたの母よ」

? 「ラナ女の子なの?」

ラナ「ええ、マキノこの子の名前はねライアよ」

マキノ「可愛いわねえラナそっくり」

ラナ「ふふっありがとうマキノ」

えつと「これはーお母さんと…誰って言った？

ま、まさかねーそんなはずないよ

整理しよう…この人はお母さんで、

もう一人の人はお母さんの友達？だよ

私は赤ん坊に生まれ変わってて名前はそのまま

姓が分からないし、お父さんもここにいない…

お母さんの友達の名前がマキノってことは…

そういう事か…あの人ほんとに願いは叶えてくれたのかな

私がこの世界に来たいって思ってたの知ってたんだ…

でも、ちよつとくらい説明して欲しかったなあ

ラナ「ごめんねライアずっと一緒ににはいてあげられなくて…

私は行かないといけないの」

マキノ「本当にこの子を手放すの？」

ラナ「ええ、しょうがないのよこの子の居場所は



誰にも知られるわけには行かないし、

この子の父親は彼だものバレたくないわ」

マキノ「そう…誰に預けるの？」

ラナ「うーん…内緒かなっ」

マキノ「分かったわ聞かないでおく身体に気をつけてね

私より先に行つちやつたら許さないからね？」

ラナ「マキノだつて！またね」

あ、私誰かに預けられるんだ

ダダンかなー？

原作開始の時私何歳なんだろう

ラナ「さあ、ライア行こっか」

お母さん…そういえば前のお母さんも羅那（らな）だつたなー

お父さんはいなかったけど

こつちのお父さんはどんな人なんだろう

ラナ「ここよライアが暮らす場所は！ダダンー！」

ダダン「なんない騒がしいねえ…！」

ラナ「ハローダダン！」

ダダン「ラナかい、久々に顔を見せたと思ったたらコブ付きかい」

ラナ「うん！私の子ライアよ」

ダダン「!?あんたのこお?!誰との子供だい!!」

ラナ「それは言えないよーふふっ

この子を預かって欲しいの私海に戻らないといけないから」

ダダン「ラナあんたもかい！たくっこは託児所じゃないってんだよ」

ラナ「も?ってどういうこと?」

ダダン「ああ、ガーブが預けてったんだ」

ラナ「ええ?ガーブさんが?」

ダダン「あ、やば」

ラナ「聞かなかったことにするねっと言うことでよろしくね

じゃあねー!よろしくー!」

ダダン「ちよつとラナアア待てええい!」

ダダンだ:やった!エースに会える!!

でも、お母さんとダダンの関係って?

まあいいや

ダダン「つたくよーお前も災難だったなライア」

ライア「あう…あ、あー」ダダンの手を掴む

ダダン「お前…まあ育ててやらア」

ダダンお願いね！私を立派に育てて！

## 2話 あなたは誰?私はライア!

(私、ライア!生まれて7にちの女の子!)

今日はお母さんが私をダダンにあずけていったよ

さみしくないといったらうそになるけどこれからは

さんぞくさんたちと、かれがいるからそれほどさみしくないの!)

ライアはダダンに布団で寝かしてもらっていたが、

眠れずずっと考え事をしていた

(これからどうなるのかな?)

かれはいないのかな?

この布団かれがつかつてるのかな?ほかのふとんにくらべるとちいさいや)

「ライア寝れないのかい」

名を呼んだのはダダンだった

それもそうだ、ライアを知っているのは

まだタダンだけなのだから

ダダンは男の子と仲間の山賊たちを連れてきて

全員にライアの周りに座るように言った

ダダン「お前たちこの子はライアってんだ詳しくは聞くな

まあ、エースと同じようなもんだ仲良くしな」

山賊たち「「へーい」」

エース（こいつ俺と同じようになってことは…）

エースはライアに手を伸ばした

するとライアは、エースの手を掴みにつこりと笑って見せた

エースがライアの手を離そうとするとライアは悲しそうな顔をする

エース（こいつ…：そうか、俺と居たいのか）

（私の大好きなエース…）

エースはライアの手が暖かく、ずっと握っていられると思った

エースの頬に涙が流れ、ライアはそれを見てつられて泣き出してしまった

（そうか、私まだ生まれて7日しかたってないんだ

止まらないよ、泣きたいわけじゃないのに泣いちゃうよ…）

エース（ごめんな、俺が泣いたからだよなごめんな俺止まらなくて）

2人の出会いはお互い涙で始まった

それから2人は四六時中一緒にいた

寝る時も、起きた時も、ご飯の時も、遊ぶ時も全てを共に過ごしていた  
そして、エースが5歳、ライアが3歳になった頃

エースとライアは出会った

サボという新しい仲間に

サボと出会ってから数日、ライアは悩んでいた

エースが同じ年のサボと海賊貯金を始めてしまった

ライアがエースについて行けなくなったのだ

ライアはエースを前に頬を膨らませて涙目になっている

(サボが羨ましいけどエースもエースよね)

私をほったらかしてサボのところに行っちゃうってさ

私をなんだと思ってるのよ)

エース「ライアもう少し大きくなったら

連れてってやるからそんなに拗ねるなよ」

(もう少ししてどれくらいよ)

エースなんか知るもんか！

「べーっ」

ライアは布団の中に入り込んでしまった

寂しい表情をしたエースは布団の向こうから

ライアに話しかけた

エース「ライアごめんな、俺が悪かった

連れてってやるから許してくれよ」

「いいの？」

エース「ああ、ただし俺から離れるなよ」

「うん！」

エースは海賊貯金、修行を始めたばかりで

ライアはまだ3歳不安はあったが

エースとライアは手を繋いで森を駆けていった

そして2人は待ち合わせの場所に着いた

そこにサボが手を振りながらやってきた

サボ「おーい！エース！ライアー！」

エースは嬉しそうな顔をしながら手を振る

エース「サボー!」

(なんだろ、嫉妬かな?エース、サボと

こんなにキラキラした目で会ってたんだ)

少し不服そうなライアを横目にエースはサボと話を始めていた

サボ「なあエース、ライア連れてきてよかったのか?

危ない目に遭うかもしれないんだぞ?」

エース「サボとであつたグレイターミナルに

一緒に行つていた時点で覚悟してたよ

ライアは死んでも俺が守るつてね」

サボ「そらそうだよな!じゃあライアも一緒に修行しようぜ!」

「うんっ! (サボグツジヨブ!」

エース「仕方ないな、よしやろう!」

そして3人での修行が始まり2年がたった頃:

「サボ!これ知ってる?」

サボ「ん?なんだ?それ」



ライアがサボにみせたのは武装色の覇気もどきだ

本物には到底敵わないが独学でもどきだが

ライアは覇気を身につけていた

「知らないならいいよー」

エース（サボいいな羨ましいライアとあんなに近くに）

エースは嫉妬していた

ライアはサボに話しかけた時サボの隣で小声で話しかけていた

その時とても近くにいたために、エースが嫉妬したのだ

この頃エースはライアに避けられていた

エースの誕生日にライアが送った

石を磨いて綺麗にしたものを

エースが落として踏んで壊してしまったのだ

エース「ライア！許してくれよわざとじゃなかったんだ」

「わざとじゃないのはわかってるんだけど

簡単に許したくないの」

涙目になりながらライアは言った

エースはそれを見て

エース「じゃあライアこれで許してくれるか?」

と言いながらエースはライアに箱を渡した

その中にはライアが磨いた石より劣るが磨かれた石が入っていた

「これ、いいの?」

エース「いい、ライアのために見つけて磨いたんだやるよ」

「ありがとう!エース!」

ライアはエースに抱きついた

サボ「なあ2人とも俺を忘れてないか?」

「ごめん」

サボ「じゃあ今日の修行、エースは目瞑ってやれよ」

エース「なんでだよ!」

そんなこんなで3人の修行は続くのであった…

### 3話 私の弟？その名はルフィ

(やあーライアだよーたまにエースを連れ去るおじいさんが

いるんだけどそのおじいさん海軍って言うのに入ってるんだって

なんだか分からないけど最近では連れ去ることも減って

遊びに来たみたいない感じなんだけど、そのおじいさんが来たら私は隠れろって言われちゃうからあまり来て欲しくないんだけどね)

？「おーい、エースおらんかー」

「あーまた来たみたいだよーエースー！」

エース「げっ逃げるぞライア」

「うんー！」

エースとライアは窓から外に出ておじいさん、ガープの様子を見ながら逃げるタイミングを見計らっていた

ガープ「エース！出てこんか！」

ダダン「ガープさん！エースは出かけてるんです今いないですよ」

ガープ「そーか、いないのか、じゃあそこにおるのは誰じゃ？」

ガープはエースたちがいるところへ向かって歩き始めた

エースはライアを出てきた窓から中に入れ、ライアが見つかるのを恐れ  
ガープの前に出た

エース「なんの用だよじい」

ガープ「じいとはなんじゃ!おじいちゃんと呼ばんか!」

エース「そんなのどうでもいいんだよ!なんの用だよ!」

ガープ「あ、そうじゃった、聞きたいことがあつての前から思つてたんじゃがダダン、  
ここにもう一人子供がおるじゃろ?」

ダダン「!?」(やばい、これ教えても大丈夫なのか?)

エース「ちつバレてんのかよ」

ダダン(あ、言っちゃったよまあバレてんなら仕方ないね)

エース「それがどうしたんだよ」

ガープ「うむ、いるのは間違いないんじゃないかな挨拶しようと思つての」

エース「挨拶がわりにどっか連れてくとかやめろよ?」

ガープ「なぜそれを!」

エース&ダダン(連れてく気だったかよ!!)

一部始終を聞いていたライアは出るか出ないか悩んでいた

どこかに連れていかれたらエースと会えなくなるのではという思いが出ないようにと語りかけてきていたのだ

エース「連れてかねえって言うなら会わせてやらねえこともねえぞ」

ガープ「よかろう！連れては行かん！」

(連れてはつてはつてどういことよ…)

エース「ちよつと待つてろよ」

何かとガープにも優しいエースにライアはガープにも気を許してるんだなと思いつつエースが自分の元へ来るのを待つた

エース「ライア聞いてたか？」

「うん、連れていかれないんだっいたらいいよ！前から挨拶したかったし！」

エース「そうか…じゃあ行くぞ」

「うん！」

2人はいつもの様に手を繋いでガープの元へと向かった

ガープ「女の子じゃったのか！めんこいのお！」

ダダン（ラナに怒られないかねえ、でもこのほうが安全なのかもしれない）

エース「ベタベタ触るなよ！」

ガープ「なんじゃエース！嫉妬か！ませとるの！」

ライアは喋ることも出来ずただガープにわしやわしやと頭を撫でられていた  
満足そうなライアをみてエースは少し寂しく感じていた

ガープ「名前は?いくつじや?」

「ライア!えつとね5才!」

ガープ「そうかライアから歳ならルフィのひとつ上じやの」

「ルフィ?」

ガープ「わしの孫じやよ」

「おじいさんお孫さんいるの?じゃあ子供さんがいるんだね!」

ガープ「そうじやよ、ルフィは親とは暮らしてないんじやがな」

「じゃあおじいさんの子供さんは亡くなったの?」

ガープ「わしの子は生きとるよ事情があつて一緒じやないんじや」

話を聞いていたライアはやつとエースの凄い顔に気付いてびっくりした

「そうなんだ!...あ!じゃあまたねおじいさん!これからエースと遊ぶの!」

ガープ「そうかまたの」

「エースごめんね!いこ!」

エース「...うん」

エースはライアと手を繋いでぎゅつと握りしめてサボとの集合場所まで離さなかつ

サボ「2人とも！遅いぞ！何してたんだよ！」

エース「すまん！じじいが来てて」

サボ「前言ってたやつか」

「サボ」めんね！今日は何する？」

3人は海賊貯金と修行を始めて2年だがライアだけは闇雲にはなく

原作知識という名の師を活かし修行していた為器用に動けた

その甲斐あつてか、海賊貯金は原作時よりも多かつたのだ

エース「今日はワニかろうぜ！」

サボ「いいなあ！ワニ！皮と肉分けて売れば相当になるかもな」

「ワニ肉…ハーブ焼きにしたら美味しそう」

3人は海賊貯金を増やすと共に修行も兼ね、なおかつ美味しいをモットーに過ごして  
いたのであつた

2年後

ライア7歳

エース9歳

2人はいつも通り出かけようとしたがライアが急に頭を上げた

「これ、海賊かな?」

ライアは見聞色の覇気のある程度使いこなせているがきちんとは使えていないので定まってはいるがないがある程度、予測はできていた

エース「海賊?この山にか?」

「ううん、少し先の村かな行ってきたいい?」

エース「そうだな、海賊にちよつかい出したりして、危険になったりしないって約束できるならいいよ」

「うん!出来る!」

エース「気をつけてな」

「うん!」

エースは心配になるがライアを縛っては行けないと思いきり送り出した

ライアは修行の末、六式を全て使えるようになっていた為、



荆と月歩をつかい、村へ向かった

「シャンクスには会わないとね！あとルフィ」

心を躍らせながら村につくと船をみている少年を見つけたライアは声をかけた  
「君この村の子？あの海賊知ってるの？」

ルフィ「ん？お前誰だ？」

ライアとルフィが話していると船から麦わら帽子を被った男が降りてきた

ルフィ「なあお前！海賊なのか？」

？「ああ、そうだ」

（うわー本物だ）

ライアはテンションが上がってルフィに自己紹介するのを

忘れていたことを思い出した

？「お前ら兄弟か？」

「違うよ、初めてあったよね？」

ルフィ「おう！俺ルフィ！お前は？」

「私ライア！よろしくね！ルフィと海賊さん」

？「ハツハツハ！よろしくなあ俺はシャンクスだ」

「よろしく！シャンクス！」

ルフィ「よろしくな！」

シャンクスの後ろから降りてくる船員たちを見てライアはまたテンションが上がった

そして気がつけば空は暗くなっていた

「帰らなきゃ！じゃあね！ルフィ！シャンクス！みんな！」

シャンクス「おう！気いつけて帰れよライア！」

ルフィ「じゃあな！ライア！」

ライアはダツシユで帰った

するとエースが腕を組んで待っていた

エース「今何時だ？」

「ごめんエース楽しくてつい……」

エース「心配したんだからな？良かったちゃんと帰ってきて」

エースはライアをぎゅつと抱きしめ、飯食べようぜと言いながらライアの手を引いて行った

こうして、ルフィたちと出会ったライアはこの先起こることを気にかけてながら過ごしていくのだった……

## 4話 ルフィの傷

シャンクス「おいルフィ！何する気だ」

ルフィ「俺は遊び半分なんかじゃない！証拠を見せてやる！」

シャンクス「おーやってみろー！何するか知らねえがなあ」

グサツ

ルフィは自身の左の頬にナイフを突き刺した

海賊たちは驚いた

ルフィ「いつてええええ!!」

シャンクス「バカヤロー！なにやっつてんだア！」

ライアはこのときシャンクスの隣にいたが、ルフィの怪我を後目に例のものを探していた

ゴムゴムの実だ

(もし、私がいることでバタフライエフェクトが起こっているなら、ゴムゴムの実だけじゃない可能性がある…原作でもゴムゴムの実はルフィが食べたし、利益がゼロになっても大丈夫な気がする)

場所は変わってマキノのお店

「「ヤローども乾杯だー！ルフィの根性と俺達の大きい旅に！」」

海賊たちは酒を飲み、楽しそうに騒いでいた

ルフィ「あー痛くなかった」

「嘘だね痛いつて叫んでたよ」

シャンクス「嘘つけ馬鹿なことすんじやねえ」

ルフィ「嘘じゃねえ！俺は怪我だつて全然怖くないんだ！連れてつてくれよー次の航海！海賊になりてえんだよお」

シャンクス「あーはっはっは！お前なんか海賊になれるかあカナズチは海賊にとつて致命的だぜ」

ルフィ「カナズチでも船から落ちなきやいいじやないか！それに戦つても俺は強いんだ！ちゃんと鍛えてあるから俺のパンチはピストルのように強いんだ！」

「ピストルかー今のルフィなら私避けれるよ」

シャンクス「ピストルう？へえーそおー」

ルフィ「なんだあー！その言い方はあー！」

それにライアはすばしっこいんだ！俺そこまで早くねえ！」

シャンクス「認めんのかそこ、ライアは俺がライアくらいの時より強いのは確かだな」  
「ほんとに?! シャンクスより強い?!」

嬉しそうなライアを見てシャンクスは満面の笑みでライアを撫でた  
シャンクス「ライアなら連れていくか考えたかも知れないなあ」

ルフィはぶすつとしている

そこへ赤髪海賊団の仲間たちが寄ってきた

「「ルフィー!」」

サブ1「なんだかご機嫌ななめだなあ!」

ヤソツプ「楽しくいこうぜ! 何事も!」

ルウ「そう! 海賊は楽しいぜえ!」

サブ2「海は広いし大きいし!」

サブ3「色んな島を冒険してるんだア」

サブ4「何より自由!!」

赤髪海賊団の仲間たちは楽しそうに語っている

「みんな楽しそうだね」

「「楽しいぞー!」」

ルフィ「わあああ」

その会話を聞いていたシャンクスは少し困った顔をした

シャンクス「お前たち馬鹿なこと吹き込むなよ」

ルウ「だってほんとだもん」

ヤソツプ、ルー「なー（ねー）」

サブ5「お頭いいじゃないか！度くらい連れて行ってやっても」

サブ6「俺もそう思うぜ」

ルフィ「おおー！」

シャンクス「じゃあ代わりに誰か船を降りろ」

ルウ「さあー話は終わりだ飲もう飲もう！」

ルフィ「味方じゃねえのかよ！」

シャンクス「要するにお前はガキすぎるんだせめてあと10歳年取ったら考えてやる

よ

ライアならいつでもいいぞ代わりにヤソツプ降ろすからな」

ヤソツプ「そりゃないぜお頭!!」

「遠慮するわ」

ルフィ「ケチシャンクス！俺はガキじゃない！それにライアも同じくらいの歳だぞ

「！」

シャンクス「まあ怒るな、ジュースでも飲め」

ルフィ「わ！ありがとう」

ルフィは嬉しそうにジュースを飲んだ

「ぷふうー」

シャンクス「ほーらガキだ！おもしろええ！」

「あははははー！」

ルフィ「きたねえぞ！シャンクス！ライアも笑うなよ！はあ、もう疲れたあ」

ベックマン「ルフィお頭の気持ちも少しは汲んでやれよ」

ルフィ「副船長……」

「ベックマン……シャンクスに優しいのね」

ベックマン「あれでも一応海賊の一角を率いるお頭だ海賊の過酷さや危険だって一番身染みてわかってる、分かるかあ？別にお前の心意気を踏みにじりたい訳じゃねえのさ」

ルフィ「わかんないね！シャンクスは俺をバカにして遊んでるだけなんだ！」

シャンクス「カーナーズーチ」

ルフィ「ほらー！」

「ルフィ シャンクスだから諦めなよ……ふふ」

マキノ「相変わらず楽しそうですね」

シャンクス「ああ、こいつをからかうのは俺の楽しみなんだ」

「あ！マキノさん！これで味見とかしないでいいからデザート作って！」

マキノ「はいはい、ルフィあなたも何か食べてく？」

ルフィ「うん！じゃあ宝払いで食う！」

シャンクス「出たなあ宝払いお前、そらあ詐欺だぜ」

ルフィ「違う！ちゃんと俺は海賊になって宝を見つけたら金を払いに来るんだ！」

マキノ「期待してるわ」

「何年かかるのやら」

ルフィ「ライアまで俺を除け者にするのか！」

「ごめんごめん」

シャンクス「ライア俺たちの船に乗るか？」

「え、ほんとに!?乗ろっかなー」

ルフィ「ずるいぞ！ライア！」

ライア、シャンクス「冗談だ」

マキノ「フフフッ」



ルフィ「シャンクス！」

シャンクス「なんだ？」

ルフィ「あとどれ位この村にいるの？」

シャンクス「そうだなあ、あと2・3回航海したらこの村を離れずと北へ向かうと思ってる」

ルフィ「ふーんあと2・3回かあ

俺それまでに泳ぎの練習するよ！」

シャンクス「それはいい事だな勝手に頑張れ」

「ルフィ寂しいの？」

ルフィ「そんな事ない！」

(そーいやそろそろたつた800万ベリーの雑魚グマだかなんだかの山賊がマキノさんの店荒らしに来るんだっけ)

ライアは原作を思い出しながらルフィをからかっていた

見聞色の覇気を使って山賊たちが来ることを察したライアはマキノがつくつてくれたデザートを持ってカウンターの中に隠れた

バン！ガシャガシャ

「邪魔するぜいこれが海賊つてやからかい間抜けな顔してやがる」

入ってきた山賊たちはマキノに話しかけた

ルフィ「もぐもぐ」

「やっぱり不味いなこれ」

ヒグマ「俺たちやあ山賊だ、が別に店を荒らしに来たわけじゃねえ酒を売ってくれ」

マキノ「ごめんなさいお酒は今ちようど切らしてるんです」

ヒグマ「ん？海賊がなにか飲んでるようだがあれは水か」

マキノ「ですから今出てるお酒で全部なので」

シャンクス「これは悪い事をしたな俺たちが店の酒飲み尽くしちゃったみたいです  
ま  
ん」

ヒグマ「ん？」

シャンクス「これで良かったらやるよまだ栓もあけてない」

パリーン

ヒグマ「おい貴様この俺を誰だと思ってる瓶一本じゃ寝酒にもなりやしねえぜ」

シャンクス「あーあ床がびしよびしよだ」

ヒグマ「これを見ろ八百万ベリーが俺の首にかかっている56人殺したのさてめえのよ  
うに生意気なやつをなわかつたら今後気をつけろまあ、山と海じゃもう会うこともな  
ろうがな」

シャンクス「悪かったなあマキノさん雑巾あるか？」

マキノ「あ、いえ私がやりますそれは」

ヒグマが剣を抜いて振り回そうとした瞬間ライアが指一本でそれを止めた

「この店荒らす気ないって最初言っただけでなかった？」

ライアは笑みを浮かべながらヒグマを睨む

ヒグマ「何だこのガキ」

ライアはこの日ズボンを履いて帽子を深く被って髪の毛が短く見え、男の子に見えるためそれを利用してライアは男の子のふりをした

「マキノさんに怪我させる気か？ボクに指一本で止められているようじゃここにいる海賊たちは誰一人お前に負けない」

ヒグマ「ガキが調子に乗りやがって」

ヒグマはライアが置いていたジュースの瓶を取りライアの上に投げ割り、ライアもびちよびちよになった

その間ライアはマキノを心配して声をかけていたのだ、それ故に気付くのが遅れた  
そしてことを理解するのに数秒要したライアはだんだん怒りが沸いてきた

ヒグマ「掃除が好きらしいからなあこれくらいの方がやりがいがあるだろ」

シャンクスたちは沈黙を貫いていた

(こいつ人が買ったジュースを…覚えてろよ雑魚グマあぬしに食べられる前に痛めつけてやる)

ヒグマ「けえっじゃあな腰抜けどもはははははは」

マキノ「船長さん！ライアくん！大丈夫ですか！」

マキノはライアを男の子だと思っっている

母親のこともありきちんと名乗ったことは無い

ライアの母、ラナの相手(ライアの父)もマキノは知らないそして赤ん坊の時、ライアはラナに少し似た白みがあったピンク色の髪をしていた

時が経ち、白い髪のがピンク色で根元が少し赤い色になっていた。

シャンクス「ああ、問題ない…ぷっ」

ルウ「っだーっはっはっは なんてざまだお頭!!」

ヤソツプ「はでにやられたなア!!」

シャンクス「はっはっはっはっは!!」

ルフィ「なんで笑ってんだよ！」

シャンクス「ん？」

ルフィ「あんなのかっこ悪いじゃないか!! 何で戦わないんだよ いくらあいつらが  
大勢で強そうでも!! あんな事されて笑ってるなんて男じゃないぞ!! 海賊じゃない!!」

シヤンクス「気持ちにはわからないでもないがただ酒をかけられたただけだ 怒るほどの事じゃないだろう？」

ルフィは怒って店を出ようと思いました

シヤンクス「おい まてよルフィ」

ルフィ「しるかっ!!もう知らん 弱虫がうつる!!」

シヤンクスはルフィの手を掴み、止めようと思いました

するとルフィの手が伸びたのです

ライアはそれを見ながらマキノが作ってくれたデザートを食べていました

## 第5話 ゴムゴムの実

(不味いデザートを食べたあとはやっぱりオレンジジュースだね)

シャンクス「!?」

海賊たちは飲んでいた酒を吹き出してしまった

ルフィ「ん？」

シャンクス「手が伸びた…!!! こりゃあ…!!!」

「伸びてる!! 凄い!!」

ヤソツプ「まさかお前」

ルフィ「なんだこれあゝっ!!!」

ルウ「ないっ!!」

「「何イ!?!」」

ルウ「敵戦から奪ったゴムゴムの実が!!! ルフィお前まさかこんな実食ったんじゃ…

!!」

ルウはメロンのような形をしたへんた模様の絵をルフィに見せながら言った

ルフィ「うん…デザートに… まずかったけど…」

シャンクス「ゴムゴムの実はな!! 悪魔の实とも呼ばれる海の秘宝なんだ!! 食べば全身  
ゴム人間!! そして一生泳げない体になっちまうんだ!!」

ルフィ「えーっ!! うそーっ!!」

シャンクス「バカ野郎オーっ!!」

(シャンクスたち、ルフィがゴムゴムの実食べなかつたらどうする気だつたんだろ気になる…)

ルフィ「魚くれっ!! 魚屋のおっちゃん」

おっちゃん「よう ルフィ近頃一段と楽しそうだな お前今日も海賊達の航海つれてつてもらえなかつたんだろ? それに一生泳げねエ体になっちまつて」

ルフィ「いいんだ! 一生カナヅチでもおれは一生船から落ちない海賊になるから! それよりおれは、〴〵ゴムゴムの実、〴〵でゴム人間になれたからそのほうがずっと嬉しいんだ!! ほら」

村長「それがどうした!! 確かに不思議だし村中面白がつとるが何の役にたつんじや体がゴムになったところぞ!!」

ルフィ「村長!!」

村長「何度も言うがなルフィお前は絶対海賊にはなりませんぞ!! 村の汚点になるわい!!」

あの船長は少しはわかつとるようじゃがもうあいつらとはつきあうな!!」

場所を変えてマキノさんの店

マキノ「もう船長さん達が航海に出て長いわね　そろそろ寂しくなってきたんじゃない? ルフィ」

ルフィ「ぜんぜん!俺はまだ許してないんだあの山賊の一件!おれはシャンクス達を  
かいかぶつてたよ!もつとかつこいい海賊かと思つてたんだ　げんめつしたね」

マキノ「そうかしら私はあんな事されても平気で笑つていられる方がかつこいいと思  
うわ」

ルフィ「マキノはわかつてねエからな男にはやらなきやいけねエ時があるんだ!!」

マキノ「そう…だめね私は」

ルフィ「うんだめだ」

? 「邪魔するぜエ」

数十分後・・・

マキノ「村長さん!!大変っ!!」

村長「どうしたんじやマキノそんなに慌てて」

マキノ「ルフィが山賊達に…!!!」